



JCV バヌアツ共和国視察報告書

2024年10月5日～10月12日



認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会



[催行概要]

目的 : ご寄付がワクチンとして子どもたちに届いている現状を支援者様に実際に見ていただき支援者様との関係を強化すること。支援国の国土、自然、生活、経済の状況をワクチン接種事情の背景として情報収集し、理解すること。

期間 : 2024年10月5日(土)～10月12日(土)

視察国 : バヌアツ共和国

参加支援者 : 6名 株式会社 エンドレス 小林 直人 様
 株式会社 Good Service 安保 学人 様
 日本リユースシステム 株式会社 辻本 真子 様、荒井 祐輔 様
 リンナー 様、スレイレック 様

J C V : 4名 奥寺 憲穂 (事務局長)
 清水 大輔 (募金開発グループ)
 乙津 俊輔 (広報・啓発・教育グループ)
 中谷 優希 (インターン)

協力 : UNICEF バヌアツ事務所、バヌアツ保健省
 東武トップツアーズ (J C V スポンサー)、柴橋商会 (J C V スポンサー)
 ピーアークホールディングス (J C V スポンサー)



ポートビラのバウアフィールド空港ビル

【1日目：2024年10月5日（土）】

日本出発、経由地のオーストラリア・ブリズベン空港へ移動

午後7時、成田空港に集合した一行は、午後8時50分、成田空港を出発。機中泊で8時間30分かけて経由地のオーストラリア・ブリズベンへと移動。機内はほぼ満席だった。

【2日目：2024年10月6日（日）】

オーストラリア・ブリズベン空港到着、バヌアツ・ポートビラへ移動

午前6時30分に、経由地のオーストラリア・ブリズベン空港に到着。乗り継ぎのため、オーストラリア入国手続きを終え、カンボジアから出発した日本リユースシステムの3名とも無事合流。午前11時前発のカンタス航空便に搭乗した。国営のバヌアツ航空が今年5月に経営破綻したことを受け、9月に就航したばかりのカンタス便だが、家族連れの観光客などもいて約200人乗りのB737-800はほぼ満席。

バヌアツ・ポートビラ到着、ホテルへ移動

約2時間かけて、バヌアツ共和国の首都、ポートビラのバウアフィールド空港に到着。首都の空港とはいえ、5年前と変わらず空港の建屋は小さいまま。入国審査場は、降り立った乗客であつという間にいっぱいになってしまった。やっとの思いで入国審査を終え、無事バヌアツに入国。空港に迎えに来た、メラネシアン・ホテルの土山さんに迎えられ、ホテルへ移動。

南半球では春を迎えた時期で、日中でも気温は30度に届かないほど。日差しは強かったが、夜は窓を開ければ涼しく過ごせる陽気だった。



マンガリリュウ村で遊んでいた子ども



ロアオ学校の生徒



チーフ・モロモロ（中央）と一行

【3日目：2024年10月7日（月）】

エファテ島西部 マンガリリュウ村

一行は午前8時30分にホテルを出発し、車で1時間ほど離れたエファテ島西部のマンガリリュウ村を訪問。道はアスファルト舗装されているが、穴だらけの部分もあり大きく揺られながらの移動となった。

はじめに訪問したのはロアオ学校。幼稚園児～中学3年生までの生徒90名がいると聞いていたが、当日出会った生徒は50名ほど。学校のチェアマンのカロさんとガブリエラ校長によると、1カ月半にわたる教師のストライキが先日終わったところで、まだ戻ってきていない生徒が多くいるという。バヌアツでは教育費を全額保護者が負担しているが、教育費を支払ったにも関わらず、ストライキ期間中に子どもが教育を受けられなかったことに対する保護者の反感も残っているそう。

次に学校裏にある畑でバヌアツの主食の一つ、キャッサバ芋を収穫。木立を切り開いた半径20mほどの空間に、バヌアツの島キャベツや唐辛子、トマトなど様々な野菜が育てられていた。村の家は、以前は植物の葉や竹を編んで屋根や壁が作られていたが、近年は気候変動により強大化したサイクロンに備えるため、コンクリートブロックで作る家が増えているという。一行はマンガリリュウ村に暮らすエファテ島西部一帯のチーフ、モロモロさんの家を訪問し、先ほど収穫したキャッサバ芋を使って、バヌアツの伝統料理「シンボーロ」の調理体験へ。粗くすりおろしたキャッサバ芋を島キャベツの上に広げて巻き、ココナツミルクで煮込む素朴な料理を作り、皆でいただいた。

その後、ポートビラ市内に戻るため、再び車で移動。クルーズ船が到着したため、ポートビラ市内の道には朝よりも車が多く、少し渋滞していた。



バナアツの伝統料理「シンボーロ」



伝統的な建築方式の建物



JICA バナアツ支所の内島支所長と茂木企画調査員



在バナアツ日本国大使館 奥田大使（中央）と視察参加者一行

ポートビラ市内／JICA バナアツ支所

独立行政法人 国際協力機構、JICA バナアツ支所に内島光孝支所長、茂木晃人企画調査員を訪問。バナアツのタンナ島産コーヒーをいただきながら、話を伺った。バナアツは他の大洋州の国と同様に人口は増加傾向にある。衛生面で蚊の対策の広がり、国外での出稼ぎが幅広い職種で長く働けるようになり、収入が増加したことで家のインフラが整ったことなどが理由と考えられる。一方で、他の国と違い、町でゴミも物乞いも見かけることはないという。

年金納付率は8%しかなく、92%は定職につかずに収穫の手伝いなど日雇いで現金収入を得ているという。バナアツではコミュニティが家族を支えて、子育てはコミュニティ全員の仕事という考えがあり、コミュニティ内で収入のある人は、あえて借りを作って現金で返す習慣があるそう。バナアツの文化や価値観を知る機会となった。

在バナアツ日本国大使館

JICA 事務所と同じビルに入っている在バナアツ日本国大使館に奥田直久大使と服部孝典参事官を訪問。環境省出身という奥田大使は、ペットボトルキャップ回収や「古着 de ワクチン」に参加したことがあり、JCV のワクチン支援を知っていたが、4 つの常時支援国にバナアツが含まれていることは今回の訪問を機に知ったという。日本との交流が少ない国なので、この視察を日本とバナアツの関係構築につなげてほしいとの期待の言葉をいただいた。

インフラ面では、大きな島の電力事情は改善してきており、そのほかの島でも集落ごとにオフグリッド（域内小規模）発電が広がっているという。日本の国際協力としては、一方的な上から目線の支援ではなく、バナアツで行われてきた有機農業を活かすような開発や、サイクロン等での被災時にもバナアツ国内ですぐに修理ができるものでの支援を目指しているというお話を伺った。



UNICEF バヌアツ事務所 デュペア代表（中央）らと視察参加者一行

【4日目：2024年10月8日（火）】

ポートビラ市内／UNICEF バヌアツ事務所

UNICEF バヌアツ事務所を訪問し、保健栄養担当のキャサリンさん、ワクチン接種担当のエスターさんからスタッフに迎えられ、UNICEF の支援活動と JCV が支援しているワクチン接種の状況、今回の視察に関してブリーフィングしていただいた。

バヌアツは人口約 33 万人のうち 57%が 25 歳未満で、国民の 70%は街から離れた集落に暮らしている。主な移動手段は船と飛行機で、今年 5 月のバヌアツ航空の経営破綻の影響は大きく、10 月から一部運行再開しているがまだ不安定な状況だという。

人口に対して医師や看護師といった医療スタッフが少なく、親子が診療所に行っても看護師が不在で、接種や治療を受けられないこともあるそう。UNICEF では医療スタッフの育成計画や、ソロモン諸島からの看護師雇用の計画なども政府とともに進めている。

JCV がワクチンの他に、保冷库や出張ワクチン接種のサポートもしていることで、3つのサイクロンの被害を受けた 2023 年でもポリオや 5 価ワクチンの接種率が 70%台を達成することができたとの成果も報告をいただき、今後も改善に取り組んでいく姿勢が伺えた。

ブリーフィングの終わりには、事務所代表のエリック・デュペアさんから「医療関係者以外の視点でバヌアツのワクチン接種現場を見ていただけることはとてもありがたい。気がついたことがあれば、教えてほしい」、「JCV が 2011 年から継続支援していることにより、バヌアツのワクチン接種の改善に長期目線で取り組むことができ本当に助かっている」との言葉をいただいた。



ビラ中央病院のエロイン院長



ウォークイン保冷庫前でレナトさんと奥寺事務局長

ビラ中央病院

病院訪問前に、ポートビラ市内のシェファ州保健局に立ち寄り、公衆衛生所長オベッド・マンオさんを表敬訪問。その後一行はバナアツ最大のビラ中央病院にてエロイン院長、オノリーモリス看護師長らに迎えられ、病院内を案内いただいた。155床ある病院で、医師50名、看護師100名、その他技師や事務員など総勢350名が働いているが、医師は80%、看護師は50%不足しているという。

日本のODAで10年前に建設された病棟には、外来患者も50名ほどいたが、今後は一次診療を地域のヘルスセンターに任せ、中央病院では症状の重い患者を診ていく方針。日本の支援で、デジタルX線、CT、マンモグラフィ、透析の施設が入るなど、病院でできることは2019年の訪問時より充実した様子。

保健省 VDI (予防接種計画課) 事務所、中央保冷庫

昼食を挟んで、シェファ州保健局と同じ敷地にある保健省 VDI 事務所を訪問。国家ワクチンプログラム・マネージャーのシモ・サムソンさん、初代コーディネーターのレナトさんらに迎えていただいた。レナトさんは、JCVが2019年にサント島を訪問した際に同行して診療所などの案内をいただいた方。5年ぶりの訪問を喜んでくださり、嬉しい再会となった。

バナアツには6つの州があり、保健施設は4階層（病院、ヘルスセンター、ディスペンサリー、ヘルスポスト）で構成されている。北部のマランパ州での5価ワクチン接種率は93%と、全国平均の55%を大きく上回っているという。理由を聞いたところ、子どもたちへのアクセスが比較的容易であることもあるが、州のコーディネーターがうまく管理できていることも要因の一つ。保健省として国全体に目を配り、他の州でも接種率が上がるように人材不足の中でも育成に力を入れる取り組みを進めていた。

2019年に試験していたドローンを使ったワクチン輸送について質問したところ、3つの島で試験運用したが、人員と費用負担が大きく本稼働に至らなかったとの回答。また、ドローンはワクチンの在庫がなくなってしまう状況での利用が想定されていたが、在庫切れにならないようワクチンを管理することを重視しているとのこと。

中央保冷庫は、3カ月前に大型のウォークイン保冷庫が壊れてしまったため、現在入れ替え工事中ということで手狭ではあったが、中を案内いただき、JCVが支援しているワクチンもしっかりと温度管理されていることを確認した。



ボートでレレバ島へ移動



アマウリ診療所とワクチン保冷库用のソーラーパネル（手前）



経口ポリオワクチン接種を受ける子ども



アマウリ診療所のリスク看護師一家と

【5日目：2024年10月9日（水）】

エファテ島の離島 レレバ島／アマウリ診療所

月曜日に訪問したマンガリリュウ村を通り過ぎ、10分ほど進んだ先にある砂浜から3台のボートでレレバ島へ。波も風も穏やかで、揺れも少なく、ボートは海面を滑るように進み、20分ほどかけてレレバ島に到着。

海岸沿いの岩場を歩き、3分ほどでアマウリ診療所に到着。アマウリ診療所を担当するリスクさん夫婦に迎えていただいた。バヌアツの看護師には5レベルあり、診療所は3レベル目の「正看護師 (Registered Nurse)」が1名所属するそう。ここでは正看護師のリスクさんと「看護助手 (Nurse Aid)」の奥さんの2人で診ているという。

レレバ島には700人が暮らし、2歳未満の子ども約20名に定期ワクチン接種を行なっているという。島には電気が来ておらず、ワクチンはソーラー保冷库で保管されていた。天候によっては十分発電できないこともあるため、保冷库にはワクチンを入れる部分を囲うように保冷剤4個を差し込めるよう設計されている。これにより5日間は電気がなくても問題なくワクチンが保冷できるという。ソーラー保冷库が設置されていることで、電気がない島でもワクチンが常に備蓄され、必要な子どもに接種できる体制が整っていることを確認できた。

この日、待合スペースには20名ほどの親子がワクチン接種を待っていた。ワクチン接種に来ていた赤ちゃんに支援者の皆さまから経口ポリオワクチンの接種を行い、バヌアツでの接種活動を体感いただく機会となった。



出張ワクチン接種会場でのワクチン接種の様子

エファテ島北部エムワ村／出張ワクチン接種（アウトリーチ）会場

ボートでエファテ島へ戻った一行は、車で30分ほどかけて北部地域のエムワ村へ移動。出張ワクチン接種会場となっている村のコミュニティホールを訪問した。

会場に到着した一行は看護師グレースさんに迎えられた。グレースさんが所属するアウピア・ヘルスセンターでは11,000人が暮らす8つの村を管轄しており、エムワ村も含めてすべての村で毎月1回ずつ出張ワクチン接種を実施しているという。

出張ワクチン接種は親にも認知されており、会場には10組以上の親子がワクチン接種や発育状況の健診の順番を待ち、看護師2名とボランティアスタッフ数名が順に案内をしていた。

エムワ村はアウピア・ヘルスセンターから歩いて30分ほどの距離だが、中には車で40分ほどの距離にある村にも毎月訪問しているという。出張ワクチン接種という看護師の地道な取り組みにより、診療所のない村の子どもにも毎月ワクチンが届けられ、ちいさな命が守られている現場を見る機会となった。



出張ワクチン接種会場の様子



会場を訪れていた親子



クリニックに来ていた子ども



ワクチン接種の様子



母子手帳（右）と台帳でワクチン接種の情報をしっかり管理



クリニックの廊下で順番を待つ親子

【6日目：2024年10月10日（木）】

ポートビラ市内／MCH クリニック

ポートビラ市内唯一の母子保健（MCH、Maternal Child Health）クリニックを訪問。8名の看護師と助産師が勤務し、管轄地域の5歳未満の子ども約1,500人と妊婦の健診などを行なっている。

月曜日から金曜日の8時～16時に開院しているこのクリニックには1日100人ほどが来院し、ワクチン接種の他に、体重測定や食事・栄養指導、家族計画のアドバイスなどを受けにくるという。私たちが訪問したときも、40組ほどの親子がクリニックの廊下や待合室に入りきれないほどに集まり、順番を待っていた。

来院する子どもが多いこともあり、接種を行う部屋には1回に3組の親子が呼ばれて、接種を受けていた。当日ワクチン接種を担当していた看護師のブラウンさんは、子どもの頃にポリオ、BCG、ジフテリア、B型肝炎などのワクチンを接種したという。大人になった今、ワクチン接種でたくさんの子どもの命を守ることができていると誇らしそうに語ってくれた。

受付には、管轄地域の子どもの台帳が何冊も置かれ、母子手帳と併せて、来院した子どもの状況を確認できる体制が整えられていた。赤ちゃんのワクチン接種は、出生届を基に管理されており、出生6週間経ってもワクチン接種できていない子どもがいれば、近隣の診療所スタッフが確認しているという。

JCV から贈られたワクチンを確実に子どもに届け、ちいさな命を救うための努力がたくさんの書類と共に重ねられていた。



診療所に来ていた親子

エラコア診療所

次に、一行は MCH クリニックから車で 20 分ほど離れたエラコア診療所を訪問。途中、車はアスファルト舗装されたメイン道路をはずれ、村へと続く未舗装のデコボコ道を 10 分ほど走り、広場に停車。横を見ると、通りから奥まったところに小さな診療所が建っていた。

正看護師のパシラさん含め看護師と助産師 3 名が勤務するという診療所で、管轄地域に暮らす乳幼児は約 150 人。毎月 30～50 名の乳幼児が診療所を訪れるという。毎週木曜日が母子保健の日で、私たちが訪問したときには 5 組ほどの親子が、ダンボールを切り抜いて手作りされた受付番号札を手にワクチン接種や定期健診を待っていた。

ワクチン保冷庫もしっかりと稼働し、小さい診療所ながらも丁寧に仕事を進めている様子が伝わっていた。スタッフの 1 人はソロモン諸島出身で、近々定年を迎え帰国予定だと語ってくれた。



道から見たエラコア診療所



小型のワクチン保冷庫



デブリーフィングの様子

UNICEF バヌアツ事務所で視察のデブリーフィング

視察全体の振り返りのため、UNICEF 事務所でデュペア代表を交えてブリーフィングを行った。冒頭、デュペア代表から、視察訪問と JCV の継続支援へのお礼の言葉をいただいた。その後、視察に参加された支援者の皆さんから質疑応答やコメントをいただいた。(発言順)

辻本 真子さん

10 代の母親を多く見た。保健省や UNICEF での取り組みがあれば教えてほしい。

<回答>文化背景もあり、容易に変わるものではないが、長期視点でコミュニティや子どもへの働きかけを続けていきたい。

小林 直人さん

バヌアツでの一番の課題はなんですか？

<回答>一つに絞るのは難しいが、なんといってもバヌアツは国全体が小さい島の集まりで、大きな都市は 3 つのみ。人口の 75% が田舎に暮らしており、子どもへのアクセスの課題、離島で診療所や医療スタッフを確保するための費用負担も大きくなっている。広い地域をカバーするためには、それだけ多くの医療スタッフを確保する必要があるが、国内に医療教育機関はなく、人材育成と確保が課題。

そこに気候変動によるサイクロン被害増加への対策、先進国の太平洋地域での覇権争いによる国内政治の不安定化、国外での出稼ぎがしやすくなったことによる働き手不足といった問題も加わっている。

安保 学人さん

実際に自分の目で見たこと、感じたことを自社のスタッフ教育に活かしていきたい。ワクチンについても、詳しく知ることができました。

荒井 祐輔さん

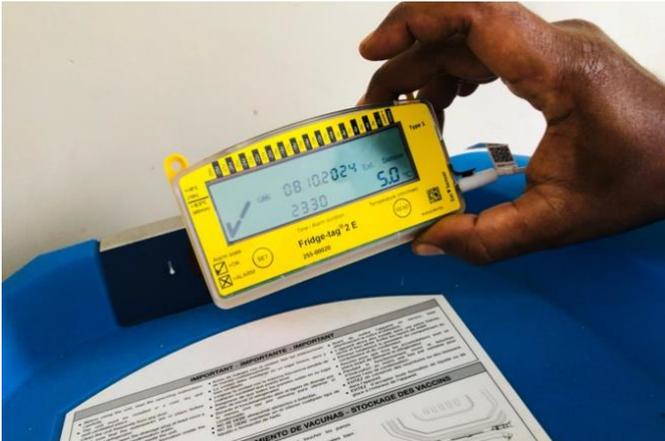
活動について実際に見て参加することで、顧客により伝えられるようになりました。日本の子どもが、世界の問題について学ぶ機会を作ることが大切なのではないかと感じています。



エラコア診療所に来ていた親子



ソーラー発電機



ワクチン保冷庫と温度計



スタッフを乗せて川の中を突き進む四輪駆動車（2019年の視察訪問時に撮影）

中谷 優希さん

医師・看護師を増やすための取り組みがあれば教えてほしい。

<回答>バヌアツ国内の看護学校が3年前に閉鎖されてから新しい看護師の育成が進まず、ソロモン諸島から看護師を招いているが、充足率は30%止まり。離島など厳しい環境の診療所では、長く働きたいという看護師は特に少ない。

昨年サイクロン・ローラの被害を確認する中で、あるヘルスセンターを訪問した。建物の屋根は吹き飛ばされてしまっていたが、幸運にも保冷庫とワクチンは無事だった。しかし、接種できる医療スタッフがそこにいなかったため、子どもへの接種ができない状態になってしまっていた。子どもを守るには、ワクチンを届けるだけ、看護師がいるだけでは足りない。両方が揃ってきちんと稼働できる状態にすることが必要。そして親にワクチン接種の大切さ伝え、子どもを連れてきてもらって初めて1人の子どもを守ることができる。

UNICEFの仕事は、保健省がきちんと接種を続けていくことをサポートすること。さらに、人員の管理をきちんと行っているかどうかを確認すること。状況を把握しにくい地域をサポートすることも重要な任務だ。

看護師や保健省スタッフのモチベーションの維持も大切だ。診療所を訪問し、看護師を適切に評価し育成することは、看護師のモチベーションの維持に繋がる取り組みで、重視している。保健省の人員は定数の3分の1しかいないため、1人が3名分以上の働きをしているが、まじめに仕事をするかどうか、人によってバラツキがある。

JCV スタッフ 乙津 俊輔

ドローンによる運搬試験を行なったと聞いていたが、現状は？

<回答>ワークショップを開いて学び、仕組みを作ろうとはしている。ただし、ワクチン自体はドローンでも運べるが、看護師を運ぶことはできない。やはり、同時に解決していくことが重要だ。



ペペヨ村の入り口でのお出迎え

【7日目：2024年10月11日（金）】

ペペヨ村

バナアツ最終日のこの日、バナアツの文化を知ってもらうために、伝統的な生活様式を見せてくれるペペヨ村を訪問。村の人々は植物を編んだ服で一行を歓迎してくれた。木を使った動物捕獲用の罟のデモンストレーションや、クモの糸を使った魚獲り用の網の製作の様子、古来より薬草として使われていたシソ科の植物の葉っぱなど、実物を見せてもらいながら伝統的な生活様式を紹介してくれた。

そして、戦士の通過儀礼の一つという、焼けた高温の石の上を素足で歩くデモンストレーションに、伝統楽器などを使った演奏で「上を向いて歩こう」を日本語で歌ってくれるサプライズも。視察で訪問した先では触れることのなかった、バナアツ文化を参加者の皆さまに少し感じてもらう機会となった。

経由地オーストラリア・ブリズベン空港へ移動

午後4時すぎにポートビラのバウアフィールド空港を出発。この便はオーストラリアへ出稼ぎに向かうという数十名のバナアツ人のグループも搭乗し、ほぼ満席だった。3時間かけて午後6時過ぎにオーストラリア・ブリズベン空港に到着。空港近くのホテルに宿泊し、翌早朝の便に備えて就寝。

【8日目：2024年10月12日（土）】

日本、カンボジアへ帰国

カンボジアへ戻る2名と、日本へ戻る8名に分かれブリズベンを出発。日本へは9時間弱かけて、午後5時過ぎに成田空港に帰着。滞在中は現地スタッフの協力により、バナアツの都市部、村、離島の実情とワクチン接種を視察でき、医療スタッフや保健省職員の日々の努力を知ることができました。

[JCV のバヌアツ支援]

南太平洋に浮かぶ 83 の島から成るバヌアツは、リゾート地として知られていますが、人口の 77% は貧困状態にあります。細菌性髄膜炎 (Hib) の発症が太平洋諸国で最も多いバヌアツでは、Hib ワクチン接種の導入が急務でしたが、一部の富裕層の所得が高いために GNI (国民総所得) を基準にする国際支援は受けられませんでした。そこで JCV が要請を受け、支援を開始しました。Hib ワクチン導入にあたり、これまで別々に定期接種していた DPT (ジフテリア、百日咳、破傷風) と B 型肝炎に、Hib を加えた 5 種類のワクチンを同時に接種できる五価ワクチンを採用。これにより、交通が不便な同国でのワクチン接種の負担が軽減されました。五価ワクチンは、1 パッケージに 10 人以上が入っている従来ワクチンとは異なり、1 人分のワクチンが個包装されているため、より容量の大きい保冷庫が必要です。JCV は、保冷庫も支援し、こうしたコールドチェーン拡充ニーズにも対応しています。

[バヌアツの基礎情報]

面積：

約 1 万 2,190 平方キロメートル (新潟県とほぼ同じ)

人口：

約 32.7 万人 (2022 年、世界銀行)

首都：

ポートビラ

民族：

メラネシアン系 (93%)、その他中国系、ベトナム系及び英仏人が居住

言語：

ビスラマ語、英語、仏語 (いずれも公用語)

宗教：

主にキリスト教

歴史：

バヌアツ共和国は、オーストラリアのケアンズの東約 1,800km に位置し、83 の島々が南北約 1,200km にわたって広がる島嶼国家です。その歴史は数千年前にオーストロネシア語族の人々が渡来してきて定住したのが始まりと言われています。ヨーロッパ人による植民が始まったのは、ジェームズ・クックによる調査が行われた 18 世紀末以降のこと。1906 年、イギリスとフランスの共同統治領となった後、数々の紛争を経て 1980 年 7 月、バヌアツ共和国として独立を果たしました。2006 年 7 月には環境 NGO「地球の友」とシンクタンク「新経済財団」により「地球上で最も幸せな国」に選ばれています。

文化：

バヌアツ共和国 83 の島々は 6 つの州に区分されています。最大の島はエスピリトゥサント島で、同島のタブウェマサナ山 (1,878m) がバヌアツの最高地点となっています。エファテ島にある首都ポートビラがバヌアツ最大の町。バヌアツの島の約半分は火山島で、険しい山の周りに平地が僅かしかありません。特にアンブリム島、タンナ島、ロペヴィ島の火山は活火山として活動が継続しており、残りはサンゴ礁から成る島。

